

広島芸術学会活動報告

一九九七年七月～一九九八年六月

米 門 公 子

▼平成九年七月十九日(土)・二十日(日)

第十一回総会・大会を広島県立美術館講堂で開催した。初日は例年のごとく総会で幕開け。平成八年度の事業報告、決算報告、監査報告がなされ、承認された。続いて、九年度の事業計画、予算案が提出され、承認された。また、本年は六期目の委員改選時期に当たっているので、候補者案が発表され、そのまま承認された。

大会一日目は能楽の特集。若者の古典芸能離れが説かれる一方で、異文化としての古典芸術への関心の高まりや本物志向の現れとしての古典芸能の見直しがなされている現状を踏まえ、過去における能楽のあり方を考察しつつ、これからの古典芸術としての能の楽しみ方などについて第一線で活躍する研究者たちによる研究発表とシンポジウムを行った。

研究発表①は広島大学大学院の大山範子氏による「謡曲〈俊成忠度〉考——作品構想とその趣向をめぐって——」。続いて、福岡女学

院大学の田代慶一郎氏が「謡曲に詩を認めた人々」と題した基調講演を行った。

シンポジウム「能の諸相」では、さまざまな切り口から能が分析されたり、意見の交換が活発に行われた。パネリストは、広島大学の青木孝夫氏、広島女子大学の樹下文隆氏、福岡女学院大学の田代慶一郎氏、司会は広島大学の水島裕雅氏が務めた。

同時に同美術館地下一階ギャラリーにおいて、能の資料の展示と能のイメージによる創作展示「能狂言文字」、榊記彌栄氏による箏の演奏も行われた。

大会初日の締めくくりは、会場の近くの中国料理店「龍皇」を借り切って懇親会。賑やかな交流の場となった。

二日目はエクスカージョンで始まった。県立美術館に隣接する「縮景園」内をゆっくり散策した。

午後からは絵画、映像、仏教美術など芸術の諸ジャンルにわたる

発表が行われた。最初は、同志社大学大学院の奥村一郎氏が研究発表②「新即物主義とオットー・ディックス——新しい写真主義——」、続いて大阪大学大学院の前田茂氏が研究発表③「二つのイメージ——ドゥルーズ『シネマ』にみるベルクソン哲学の展開——」を、最後に徳島文理大学の浜田宣氏が研究発表④「福山市・高松寺の文化遺産——所蔵品悉皆記録の必要性——」を行い、大会は終了した。一般参加も多かったため、参加者数は不明。

▼平成九年九月十五日(月)

会報第四十四号を発行。掲載記事は第四十回例会報告「住建美術館見学」(報告者・田中瑞香)と第十一次大会発表要旨(報告者・研究発表①/田中瑞香、基調講演/中尾和恵、シンポジウム/家ノ上さくら、研究発表②/清永修全、研究発表③/大石和久、研究発表④/河野奈々)のほか、巻頭言はヴァイオリニスト・中畝みのり氏による「ある恋の物語」など。

▼平成九年十月四日(土)

第四十一回例会は「中国」をテーマに広島大学法学部・経済学部東千田校舎で開催した。最初の発表者は比治山大学の寺本泰輔氏で、「日中文化交流学会」を結成するに至った経緯や、毎年続けている中国への旅の話をした。

続いて、来日中であつた中国・山東大学美学研究所所長の周来祥氏が「現代中国における中国・西洋比較美学のあり方」というタイトルで講演を行った。通訳は広島大学大学院生で、当学会の会員でもある林子竝氏が務めた。参加者は四十八名。

▼平成九年十一月二十二日(土)

会報第四十五号を発行。記事は第四十一回例会の発表要旨(報告者・「中国を学ぶ会」を結成/亀井克明、「現代中国における中国・西洋比較美学のあり方」/田中瑞香)のほか、巻頭言は比治山大学の寺本泰輔氏の「『泰』は『体』を表す」、イヴェントリポートには広島大学の安西信一による「グリーンフェスタひろしま'97」を掲載した。また、企画委員会の入野忠芳氏が、第二回芸術作品展を実施する予定であることを紙上で発表した。会期/一九九八年九月一日~六日、会場/広島県立美術館・県民ギャラリー、テーマ/極小と極大。

▼平成九年十二月十三日(土)

第四十二回例会を広島県立美術館講堂で開催。一人目の発表者は染色家の杉谷富代氏。一九九六年春の「フランスにおける日本年」に正式参加し、個展を開いた時のことや、自然との対話を愉しみがらもくもくと続けている「植物染」への思いを話した。

二つ目の発表は中畝みのり氏による「ヴァイオリンの論」。冒頭で友人の詩人・井野口慧子氏が中畝氏をイメージした作品〈魂柱〉を朗読、それに合わせて「G線上のアリア」を演奏した。その後は、豊富な演奏経験に基づいた演奏論や弦楽器の魅力などを語った。参加者は百名余り。

▼平成十年二月一日(日)

会報第四十六号を発行。記事は第四十二回例会の発表要旨(報告者・「生きた歴史の街」/清永修全、「ヴァイオリンの論」/赤坂梢)、巻頭言は広島大学の安西信一氏の「ゴミの美学」を掲載した。前号に引き続き、入野忠芳氏が第二回芸術作品展のテーマ「極小と極大」について説明を載せた。

▼平成十年二月二十二日(日)

第四十三回例会を広島県立美術館講堂で開催。比較的最近来広した二人の美術史家に、「東西芸術における世界・異界」というテーマで、それぞれの研究の立場から発表してもらった。

最初は広島大学学校教育学部の菅村亨氏。「日本仏画に現れた地獄」というタイトルで、日本人が「あの世」の一つと考える地獄をどのように感じ、造形化してきたのかを、古代、中世の仏画を通して話した。

続いて、同大学総合科学部の長田年弘氏が、「絆を絶たれること——古代ギリシャの墓碑」と題して、紀元前五〜四世紀にアテネで作された墓碑芸術をスライドで紹介しながら、これらの家族墓碑が何を語っているかを解説した。参加者は四十五名。

▼平成十年四月二十五日(土)

会報第四十七号を発行。記事は第四十三回例会の発表要旨(報告者・「日本仏画に現れた地獄」/大山範子、「絆を絶たれること——古代ギリシャの墓碑」/清永修全)、広島大学の青木孝夫氏による巻頭言を掲載した。また第十二回大会の日程(七月三十一日、八月一日、二日)を会員に早めに知らせることも兼ねて、大会準備の経過を報告した。

なお、会員に会報を送付する便に、広島芸術学会第十二回大会の研究発表募集の知らせと芸術展の出品案内・募集も同封した。

▼平成十年五月二十三日(土)

第四十四回例会を開催。久々の野外例会で、広島県安芸郡下蒲刈町にある「蘭島閣美術館・松涛園」の見学に出掛けた。案内役は、比治山大学の寺本泰輔氏。蘭島閣美術館には、日本近代・現代絵画を中心に、約三千点が収蔵されている。中でも、同町ゆかりの寺内萬治郎や南薫造らの作品が充実していた。

松涛園には朝鮮通信使資料館・陶磁器館・あかり館・蒲刈島御番所の四館があり、それぞれに見応えがあつた。参加者は二十三名。

▼平成十年六月三十日(火)

会報第四十八号を発行。第四十四回例会で出掛けた下蒲刈町の「蘭島閣美術館・松涛園」見学記(報告者・石原名穂子)、巻頭言には高石 勝氏の「コンセプト」を掲載。また間近に迫った第十二回総会・大会の日程や研究発表の要旨なども載せた。

〈平成十年六月末現在、法人会員十一法人、個人会員二百二十名(特別会員六名、一般会員百八十九名、学生会員二十五名)〉。

(こめかど きみこ 広島芸術学会事務局)